2008(平成20)7. 15

漢詩神奈川

第４号

神奈川県漢詩連盟
横浜市旭区中沢
３－３９－９
電話045-361-2033
FAX045-361-2033
発行人 中山　清
編集人 田原 健一

新しい風を力に！

二十年度連盟総会開かる

平成二十年五月一七日(土)午後1時より、神奈川近代文学館で神奈川県漢詩連盟の第3回総会が開かれた。石川顧問以下53名もの人が茅ヶ崎、鎌倉、秦野、座間等の県内各地より集まった。

冒頭、中山会長より順調にこの団体が発展成長している事、それもこれも会員各位が連盟の事業企画に積極的に参加していただいている所為と謝意を述べられて始まった。確かに、その後の事業報告で新人研修を含む研修会で40名、吟行会で44名、この総会にも53名と縛りのゆるいこの種の団体ではかなりの参加人数であった。総会自体は各事業ごとに世話役側参加者側双方から報告感想が述べられ、役員人事、会計決算、今年の予定と順当に会議が進み、和やかな雰囲気の中、所期の目的を達して終わった。

記念講演は石川先生によるお話で、演題は「神奈川の漢詩・続」、設立総会の時の続きで判りやすい楽しいお話し振りに、アッと言う間もない一時間であった。

この後、港が見える丘を下り、中華街で懇親会、桜庭氏の司会の切り回しの良さで和やかに愉快に会員間の親睦の時を過ごせた。吟詠は五人にも及んだ。

宴会の席上、石川先生が箸入れの紙にさらさらと一詩お書きになられた。わが連盟の活動振りに対するお褒めの言葉である。

鴎盟創會僅三年　春夏秋冬稽古全
可看金河新様式　師生雲集満詩筵

とくに転句の[可看金河新様式]のお言葉が嬉しい。会員数が順調に増えてきている神奈川の活動が先生のお目に止まったのだろう。

この総会の時点で会員数は122名となった。87名でスタートした創立時からすれば、予想外の人員規模である。定年を期に新しく風雅の世界に挑もうとする人、自詠自書、自作自吟を目指して幅を深みを求める人、動機は様々である。いずれにしても、新しく漢詩に取り組むお仲間が次々と現れてくることは嬉しい限り。

新しい人を新しい力にして、この集まりを一層中身のある集団にしていければと役員一同心を新たにしている次第である。（田原 健一 記）

◆20年度総会の決議事項

6月17日総会での議案は左記の3件でしたが、満場一致で異議なく承認されました。

今年はとくに2年に1回の役員人事更改の時期でしたが全員再任となりました。

▽役員体制

会長　中山清　副会長　岡崎満義
理事　石川省吾　玉井幸久　福原豊弘　古田光子
執行理事　礒野衛孝　桜庭慎吾　水城まゆみ　田原健一　監事　住田笛雄　事務局　田原健一

▽19年度決算　収支尻　△32千円(明細6頁)

▽20年度予算　収入420千円　支出420千円

◆「神奈川の漢詩・続」

石川忠久先生の総会記念講演録

緑風爽やかに薔薇の咲く、港の見える丘公園の神奈川近代文学館に、今年も石川忠久先生をお迎えし「神奈川の漢詩・続」の記念講演が開かれました。ラジオ講座の先生の名調子のファンも多く、先生の講演を楽しみにして来られた方や、今年初めて入会され先生の解り易く又博識なお話に感銘を受けられた方も多いことと思います。

相模は幸い箱根、鎌倉など詩どころとして名高い所が多く、街道を往来する文人による玉韻が数多く残されています。その中から今回は以下の内容で講演されました。

一、頼鴨厓　（過箱根嶺）
二、安積艮斎（函嶺）
三、夏目漱石（送友元箱根三首　其一）
四、市河寛斎（浴塔沢温泉数日小詩紀事）
五、徳富蘇峰（湯河原雑吟）
六、鈴木豹軒（真鶴途上梅花開）
七、阿藤伯海（鎌台登丘孤望）
八、斉藤晌　（鎌倉覧古）

江戸から明治、大正、昭和の時代の文人の箱根から鎌倉まで県内各所の詩でした。其の中から三首を以下に掲げます。

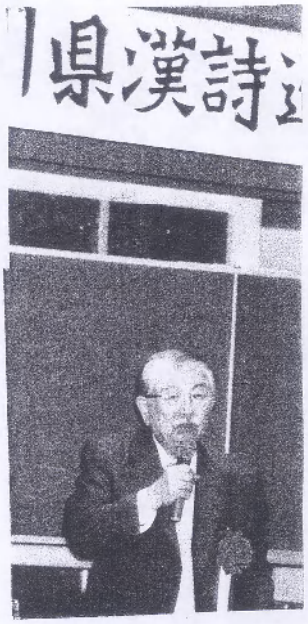
過箱根嶺

当年意気欲凌雲
快馬東馳不見山
今日危途春雨冷
檻車揺夢過函関

箱根の嶺を過ぎる
頼　鴨厓

当年の意気雲を凌がんと欲す
快馬東に馳せて山を見ず
今日危途春雨冷ややかに
檻車夢を揺がせて函関を過ぎる

第一回の森春濤の「踰函関」と好一対をなす若い書生の箱根越えを詠った詩。檻車は唐丸籠の事、前半は意気盛んな頃のさま。山など目に入らず、後半は冷たい雨のなか唐丸籠に押しこめられて行く、その境遇が正反対に変転したことを強烈に印象づける詩。



浴塔沢温泉数日小詩紀事

塔の沢温泉に浴すること
数日、小詩もて事を紀す
市河寛斎

一道霊泉分七処　一道の霊泉七処に分かれ
成邨各各倚巉巖　邨を成し各々巉巖に倚る
能愈世習軽浮病　能く世習軽浮の病を愈し
使我新詩超不凡　我が新詩をして超不凡ならしむ

この詩は後半が面白い。このくすしき温泉のちからによって、軽佻浮薄な世間の悪習がはらわれ詩が上手くなるという。「超不凡」は今風にいえば「超すぐれもん」になると。

鎌台登丘孤望　　鎌台にて丘に登り孤望す
阿藤伯海

東関一為客　東関一たび客と為り
万里人逢秋　万里　人　秋に逢う
覇府悲揺落　覇府　揺落を悲しみ
塞雲任去留　塞雲　去留に任す
臨風古城上　風に臨む　古城の上
植杖大江頭　杖を植（た）つ大江の頭
日暮鴻声断　日暮　鴻声断え
天涯送小舟　天涯に小舟を送る

作者は岡山県鴨方の人。東京大学と京都大学に学び、一高に招かれ漢文を講じた後、故郷に帰り隠棲する。この詩は昭和一五年か一六年の秋の作。鎌倉を格調高く詠っている。

（水城　まゆみみ　記）

★　神奈川の漢詩についてもっと知りたい方は去年秋に出版された「**東海の風雅―日本の漢詩の心**」研文出版をご覧ください。約60首強の神奈川の漢詩が懇切な解説とともに紹介されています。石川先生が東京新聞神奈川版に「かながわの漢詩紀行」との題で一年半にわたって連載されたコラムをお纏めになったものが本の後半に載っています。

◆研修会に出て

古田　光子

朝は又も雨、しかし昼過ぎには止んで天気は回復。提出された詩は19首であったが、詩稿無しの参加や欠席もあり20名の会合であった。これまでどおり、まず作者が自分の詩を説明、それに対する質疑の形で進められたが、回を重ねて皆さん慣れてきたのか、活発な意見が飛び交った。

自由題なので、国際結婚、オリンピック、初心者講座などさまざまな詩があったが、旅に関したものが一番多かったであろうか。柿の木陰での小僧の様子とか蟷螂が虫を食べてる姿など面白いところに眼をつけられたものがあった。

全体を通して感じたのは、ついあれもこれもと詠みこみ過ぎて何を詠みたいのか、主題がはっきりしなくなってしまうということである。兎に角七言絶句は、わずか二十八字の短い詩なのだから、思い切って材料を削り、自分の言いたい事をはっきりさせる必要を痛感させられた。

典故のある語句、題の付け方、先人の詩句を引用する場合の注意など、いろいろ教えられることが沢山あった。また、中山会長の三首の添削例も良い勉強になった。

四時までの予定を三十分以上もオーバーして終わったが、皆さんの熱心さの中で寸刻の感であった。

最後に次回の研修会を句会方式でやったらどうかとの提案が出された。作者の名は伏せた詩稿が参加者に送られ、各自、最も良いと思う作品を選んだ上で出席し投票でいい詩を決めようと言うやり方である。やってみようということになった。新しい試みである。如何あいなるのやら。次回は心して参加したい。

（終）

◆「扶桑風韻」で4名入賞

昨年は「光」という題でしたが、本年五月十日に開催された全日本漢詩連盟五周年の記念総会で、本会会員の田原健一さんが優秀作品賞で表彰されました。他にも佳作、入選で3名の方が入賞されました。

編集子の自画自賛は困るとの意向を体して、お愛想なしにさらりと入賞作品をご紹介します。

曉　湖　　田原健一

山脚風吹曉霧消　山脚風吹いて　曉霧消え
湖心時望小舟漂　湖心時に望む　小舟の漂うを
半弧放散打魚網　半弧　放散　打魚の網
捕得日輪波上跳　捕え得たり日輪　波上に跳る

海樓秋月　　榮翠　小林榮一

新寒脈脈海邊樓　新寒　脈脈　海辺の楼
千里迢迢萬象幽　千里迢々　万象幽なり
一片秋心蕭瑟夜　一片の秋心　蕭瑟の夜
月明如水照詩愁　月明水の如し　詩愁を照らす

中秋觀月　　水城まゆみ

走雲吐月又呑月　走雲月を吐き　又　月を呑む
弄牖清光涼滿襟　牖を弄す清光　涼　襟に満つ

何惜風檐無酒盞　何ぞ惜しまん　風檐に酒盞無きを
叢蛩唧唧有佳吟　叢蛩　唧唧　佳吟有り

春郊散策　　水紐　古田光子

晴天郊野野風柔　晴天の郊野　野風柔らかなり
拾翠尋花乘興遊　翠を拾い花を尋ね　興に乗じて遊ぶ
忽看古祠光滿處　忽ち看る古祠　光　満つ処
幼孩嬉笑逐鳴鳩　幼孩嬉笑して　鳴鳩を逐う

今年の題は「音または韻」です。日頃の精進の成果を問うべく「扶桑風韻」に投稿なされては如何ですか。

（水城　まゆみ　記）

◎横浜開港記念の詩を用意しておいてください

ご承知のとおり、来年6月2日は横浜開港百五十年の記念日に当たり、色々な企画が横浜市を軸として計画されています。

我々も記念の年を祝って『横浜港の漢詩』を皆で作ってみようという計画があります。

根城にしている神奈川近代文学館はこの港を見下ろす処にあり、馴染みの風景で、すでに会員の方の港の詩を幾つか拝見しています。

どんな風に実施するか検討中です。準備しておいて下さい。秋頃には募集要項を固めて連絡します。

新人研修、好評裡に終了！

今年の初心者入門講座は、4月から6月にかけて月2回のペースで計6回の授業が行われました。受講者は去年とほぼ同じ25～27名、最終的に七言絶句の卒業作品を出された方は、25名でした。今年の講座は、去年の反省も入れて、実践的な授業に徹したことです。二回目に一句、三回目には一詩作成の宿題を生徒に要請し、授業の後半は提出の宿題詩をどこがどう悪いか改めるべきか、4～5人のグループに分かれ世話役の先生とのやり取りの仲で学んでもらう形にしました。生徒側の反響も我々世話役の熱意が伝わってか、いつも時間不足の状況でした。最終日は自分の卒業作品を発表、皆さんで批評しあいました。

事務局に意見御礼の手紙が届きました。その中から抜粋してご紹介します。

◆門内の小僧？　大谷　明史

この度は、今の世には貴重なご企画「漢詩初心者入門講座」をご実施いただき、終始痒きところに手の届くご配慮を賜り、真に有難うございました。

お陰をもちまして、つい先日までの「門前の小僧」もなんとか「門内の小僧」のお仲間の末席に加えさせて頂いたかと勝手に感得しております。

加えて、「フォローアップ研修会」をもご準備いただき、受講生にとっては誠に有難き幸に存じます。

講座においては絶えず5～6人の先生が懇切丁寧に寺小屋方式にてご教示いただき、ご高識に触れては畏敬の念を深めると共に、この道の遼遠なることを知り果たして自分は歩いていけるのか、身震いする想いで立っています。

十月の提出詩に万全の準備をします。

有難うございました。　（終）

◆初心者入門講座に参加して　吉岡　昭夫

たまたま詩吟を嗜む友人に、詩作も勉強してみたいので一緒にやらないか、と誘われたのが参加のきっかけです。漢詩には昔多少親しみ、幾つかの絶句など暗唱もしておりましたが、自分で作ることなどできるだろうかと危惧して臨みましたが、始めてみるとすっかりハマッテしまいました。これもご担当くださった先生がたのご指導の賜物と改めて感謝いたします。

次の段階は勿論3ケ月後の第二作発表を目指しますが、改めて感じていることは、たとえ趣味でやるにせよ漢詩の奥深さに挑むには覚悟を決めてじっくり取り組みなおさなければならない、と思っています。

私なりにそのステップを思い描いていますのは

① まず先人の優れた詩を出来るだけ多く鑑賞する。

② つぎに真似て作ってみる。

③ ある程度判ってきたところで自分の詩想を織り込んでみる。

と言うようなものです。①②では単なる鑑賞のみではなく、詩想、構成などとともに韻や平仄などの作詩の仕方も併せ学んでいきます。

これについては第5回の中山先生の講義（4首の解説）が大変有意義でした。また私なりには、受講し始めてから、石川先生の「漢詩を作る」（大修館書店）を副教本にしていましたが、これも大変参考に為りました。

しかし今もっとも切実に感じておりますのは、やはりまだ暫らくは、よい先生にご指導頂き、添削講評などをしてお願いする機会が欲しいと言う事です。ご紹介くだされば幸いです。

中山先生も言われましたが、趣味と言えども時間、労力とともに費用も惜しんではならないと思っています。

最後に、漢詩愛好者の裾野を広げるべく、我々の如き初心者を育てる努力を懸命になさっての連盟の皆さんに改めて感謝します。　（終）

◆「杜甫を詩う」盛況！

鎌倉『中国の名詩を詩う会』主催

「映像と共に詩聖・杜甫の漢詩を詩う」と銘うっての『中国の名詩を詩う会』の催しが、去る六月二五日(水)に鎌倉生涯学習センターで開催された。約150名の人が集まり大盛況であった。

同会の主宰佐藤敏彦氏を軸に、会員二十二名の方々により、杜甫の名詩、春望、月夜、蜀相、登高、登岳陽楼等十五首が経年順に朗詠された。フルートと箏の伴奏がゆったりと流れるなか、当時の杜甫が辿った路である長安、成都、長江沿岸の街などを描いた中国の墨彩画がスクリーンに映し出され、臨場感を一層高める演出であった。

朗詠に先立っての一首毎の懇切な解説は、当時の杜甫の心境を紹介して、朗詠者の声調とともに詩の味わいを一層深いものにした。

杜甫の詩は難しいという人もいるが、今回のような朗詠と丁寧な解説に触れると千三百年前の杜甫の心情がストレートに伝わってくるのを感じ、深い感動を覚えた。

前回の李白の企画と共に、詩人一人一人を深く追求してゆく『中国の名詩を詩う会』の方針はまことに意義深い方向であると思う。

また当会会員でもある根津章伶さん(箏の伴奏者)が代表を務める「AMDA(アムダ)鎌倉クラブ」の呼びかけで、今回の四川大地震の被災者支援のための義捐金の募集が行われた。四川省綿州は詩仙と言われる李白の生地であり、成都は杜甫が浣花草堂を建て足掛け六年を過ごし多くの名詩を生んだ地である。

詩仙、詩聖のゆかりの地、四川省の復興を願い、多くの出席者が募金に応じた。

当日はまた、全日本漢詩連盟(本年五月で創立五年)の常務理事でありわが神奈川県漢詩連盟の副会長である岡崎満義さんから両連盟の活動状況および会員の増強の必要などに触れての挨拶が行われた。

(桜庭　慎吾　記)

◆吉川幸次郎先生のこと

岡崎　満義

大学2回生のとき、吉川幸次郎先生の「中国文学史」の講義を一年間聴いた。これは実に楽しかった。演習ゼミではなく講義だったので、予習復習もせず、時々、漢詩を北京語で読んでくださるのを、音楽のようだ、とうっとり聴いていた。高校生の頃、岩波新書で出た吉川先生の「新唐詩選」と「新唐詩選続編」を愛読していたから、先生の肉声の授業に出たいと思っていた。

自分は現実の中国人以上に中国人だ、という恐るべき自負が吉川先生にはあったように思う。自信に満ちた声、大きな造作で目鼻立ちのはっきりした顔が、まさにこれぞ象牙の塔のアカデミズムだと思わせた。近寄りがたい雰囲気が、いつも身辺に漂っていた。

出版社に勤めて二～三年経った頃、たしか昭和三十七、八年頃だったかと思うが、NHKテレビの教育チャンネルで、吉川先生の教養講座「杜甫」が一年続いた。これは素晴しい番組だった。いま、たとえばテレビの中国語講座をみると、まるでデイズニーランドで遊ぶような作りになっている。視聴者をいかに面白がらせるか、これでもかこれでもかと芸能化路線を押し付けられている気分である。

吉川先生の「杜甫」はそれと正反対、シンプルで清潔な作りだった。先生の後ろに小さな黒板が一つ、先生の左右に日本人助手と韓国人の大学院生。杜甫の詩をまず日本人助手が日本語で読み、続いて韓国人大学院生が韓国語で朗読、最後に吉川先生が流暢な中国語で読む、という授業だった。そのころ、私は、個人的に、台湾から来た留学生に中国語を習っていたので、吉川先生の中国語を聞くのは楽しみだった。韓国語は全く分らず、わずかに音楽性のようなものを感じただけだった。

それでも、そんなシンプルな授業から、中国文学、文化の広がり、異民族の受容の仕方がほんの少しだけ感じ取れたような気がした。

あんなに充実した教養番組に、以後、出会ったことが無い。私が番組制作者だったら、さらにベトナム語とモンゴル語、英語も加えて、講座「杜甫」を作ってみたいと思う。　(終)

◆「吟詠と漢詩」について

谿月流瑞恵会宗家
室橋　幸子

吟詠を学ぶ時、短歌や俳句、近体詩など題材は色々ありますが、多くは漢詩です。その漢詩を吟じるには、朗誦したりしながら詩の内容を理解するため勉強します。書道では展覧会に出品のさい漢詩を書きますが、書作品の芸術価値が一番ですから、詩の内容は余り重視しません。

吟詠で吟じる時は違います。吟詠は、一般的には「声質」と「節調」で人の耳に訴え、良い声、うまい吟と評価されます。しかし、詩を本当によく理解して吟ずるには、それだけでなく「詩の心」が必要です。

詩をよく理解して吟じる事ができたら美声でなくとも器用な節回しでなくとも、何か人に訴えるものがあるのではないでしょうか。吟の中には、祈りのように吟ずることもありますが、多くは人に聞いていただく吟詠と思います。

漢詩の作詩というと、参考書や、漢和辞典や、平仄韻脚の決まり等面倒な事もあります。でも苦労して形が出来た時、喜びがあります。若い頃、私は、書道は書くだけ、吟詠は吟ずるだけ、漢詩の作詩なんて難しくてあまり縁の無い部門と考えていました。しかし、作詩をすることによって自分の中で大きな「つながり」を得て、なんとも言えない深みを感じるのです。新しい世界に発展するような可能性も感じます。

最近では書道誌には漢詩の話や作詩の投稿欄もあり、吟詠誌においても、吟詠家は漢詩を学ぶべきとの風潮は強く作詩コーナーが設けられたりしています。

私自身は不勉強のまま年数ばかり経てしまいましたが、意識を新たにしてご指導をお願いしたく思うこの頃です。

（終）

◎会員動向

▽新規加入（平成20年1月以降）

三橋稟也（横浜市）小松日出夫（大和市）
笠原智（座間市）武藤裕輔（座間市）
山中宏子（伊勢原市）宇津井寛（鎌倉市）
神田英昭（鎌倉市）渡部淳子（大磯町）
大森正泰（川崎市）永倉喜久野（横浜市）
森本隆泰（厚木市）中島龍一（川崎市）
佐藤憲助（綾瀬市）吉岡昭夫（平塚市）
入山彰儀（横浜市）中津川伸一（藤沢市）
田中絢（相模原市）石川雅則（横浜市）
山本宏子（三浦市）島崎正明（横浜市）
大谷明史（横浜市）（順不同）

▽退会

石川豊　近藤喜一郎　石田和子
大藤宏　佐々木けん　長谷川胤彦
三崎肇

▽会員数　122名

同好のお友達をぜひお誘い頂き入会させて下さい。紹介、大歓迎！

◆平成19年度決算報告

平成19年度の決算は、年度収支としては、32千円の赤字となりましたが、繰越金の流用で賄いました。決算の処理にあたっては、監事の住田笛雄氏の監査を経て今総会で承認されました。

平成19年度決算

収入　　支出　　（単位＝千円）

一般会員会費	208	通信費	76
賛助会員費	20	印刷費	50
計　106名分	228	文具雑品費	22
懇親会関係	144	会場関係費	73
その他	54	懇親会関係	194
		写真代	33
		〒局振込料	10
合　計	426	合　計	458

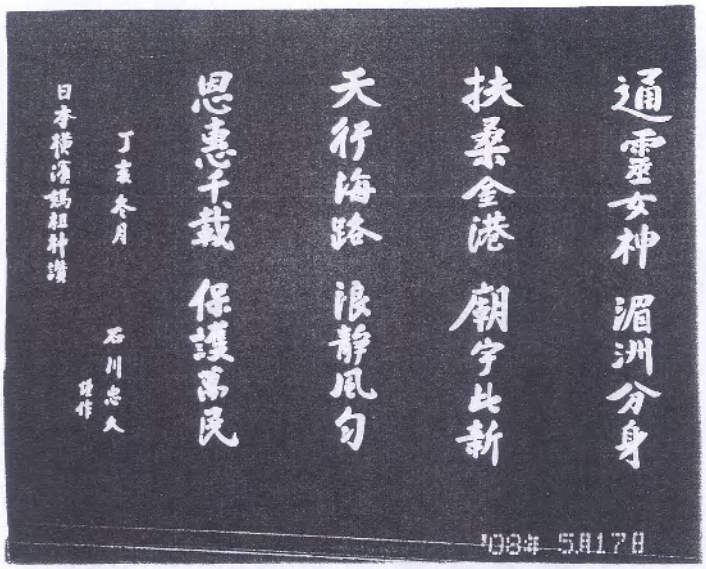
収支尻　△32千円　　現預金残高　97千円

◆石川先生の横濱媽祖神讃

一八五八年に結ばれた日米修好条約を機に、横浜は開港場として整備され、翌一八五九年六月二日開港しました。来年、二千九年は横浜開港百五十周年にあたり、いろいろの記念行事が開催されることと思います。わが神奈川漢詩連盟も、市の企画に何らかの形で参加できればとも思っています。

ところで横浜中華街の媽祖廟に石川先生の詩が掲げられているのをご存知でしょうか。五月十七日の連盟総会でご講演いただきました先生と、中華街での懇親会の後有志の人で見学しました。

先生の詩は廟門の右側の壁に雨よけのついた枠の中の陶板に焼き付けられて、展示されていました。



詩は「詩経」の頌の形式の四言八句で押韻（十一真韻）されています。

媽祖については、関帝廟に祀られる関羽に比して日本では知られていないので、横浜媽祖廟のパンフレットに従って少し説明をします。媽祖は北宋時代に実在した、福建省、林氏の娘で、小さい時から才知に長け、十六歳で神から教えと銅製の札を授けられました。神通力を用いて海を渡り、雲に乗じて島々を巡回し、札の力で悪や災いをしりぞけ、病を治す彼女を人々は「通玄の霊女」と尊敬するようになりました。二十八歳でなくなった後も、紅い衣裳をまとって海上を舞い、難民を救助する姿が見られたと言います。その為、人々は廟を建て護国救民の神として祀るようになり、歴代皇帝も贈り名をして敬意を示しました。

人から神となった「媽祖」は航海を護る海の神としてだけでなく、色々な災害から人を護る女神として、中国、台湾、その他、世界の華僑社会で信仰されているようです。

横浜中華街に行く機会があれば覗かれませんか？関帝廟の近くです。

（中山　清　記）

◆見延典子著「頼山陽」

「頼山陽」という本が出た。徳間書店からの出版で今年の新田賞受賞作である。著者は「もう頼つえはつかない」で若い才能が評判になった見延典子さん、すでに52歳の老練の小説家である。新聞連載の小説で、予想外に面白く、山陽の性格はこんなにも自由闊達であったのかと認識を改めさせられた。

その中から、若い妻の愚痴を詠んでいる詩。

「山妻來有叙　無禄須衆眷　八口豈獨處
輪鞅不到門　飢寒恐自取　願少退其鋭
應接雑媚嫵」

（山妻が来て一くだり、稼ぎが無いから周りの世話になるばかり、八人どう生活していけばいいの、偉いさんは寄り付かないし、飢えと寒さに悩まされそう、お願いだからとんがってばかりいないで、少しは人に愛嬌を振りまきなさいな。）と言ったところ。

大著「日本外史」に20年もの歳月を掛けた漢文家で、その詩文から硬質の学者のイメージを抱いていたが、若い頃から脱藩、幽閉、廃嫡女流詩人との交際等々情熱に任せた生き方はなるほど小説になるなと見延さんの見識も頷かされた次第。一読をお勧めする。

今年の秋のスケジュール

カレンダーに予定を記入しましょう。

●研修会

今回は新しい試みとして、俳句の世界で行われている句会方式を漢詩の集まりの場で実施してみます。俗心を煽るやり方との危惧も承知のうえ、実験してみます。

事前に漢詩一首をご投稿ねがい、集まった詩稿をコピーして参加者にあらかじめお配りします。ここまでは従来と変りませんが、配られる皆様の作品は作者名を伏せてあります。その作品集の中から、優秀詩1首、佳作3首を事前に選んで頂いておいて、当日、発表してもらいます。皆様の選考の結果は当然に集計され、優秀作品が決まる仕組みとなります。

▽時期　　平成２０年１１月４日(火)午後１時～４時
▽場所　　神奈川近代文学館　２階会議室
▽詩稿提出期限　平成２０年１０月１５日(水)迄　事務局宛(期日厳守)

●新人フオローアップ研修会

今年４～６月実施の初心者入門講座に参加された方を中心に、新人の研修を行います。参加者は、七言絶句一首を事前に提出してください。

▽時期　　平成２０年１０月７日(火)午後１時～４時
▽場所　　神奈川近代文学館　２階会議室
▽詩稿提出期限　平成２０年９月３０日(火)迄

●鎌倉大仏吟行会

今年の秋の吟行会は、鎌倉の大仏と長谷寺の拝観です。石川先生、窪寺先生ともに御参加の予定です。伯梁体もやります。奮ってご参加下さい。

▽時期　　平成２０年１２月６日(土)午前１０時半～
▽場所　　鎌倉大仏殿の前に集合、大仏と長谷観音を拝観する。
▽昼食　　長谷懐古亭
▽会費　　４千円（拝観料込み）
▽申込　　１０月頃、改めて往復葉書でご意向を伺います。

◆編集後記

▽去年の暮から地デジのＴＶを見ている。視力が３．０になった感覚である。人間の目より鮮明である、おかしな言い草だが。長い歳月、我々人間が見てきた山川草木の景観がカメラを通して一変する。様変わりに美しい。神の領域に入ってきている。天空からの俯瞰、スローモーション、極微接写種々のカメラワークが更にその感を助長する。月からの地球の出の光景を看るに至っては、詩は自然に対する感嘆の声である、なんて悠長に構えていいものかどうか。風景をどう詠むか、変るもの変らないもの、人間の心は、感動は、漢詩は、附いていけるのか。

▽今年の夏は、そんなＴＶの前で暑くなりそうである。北京のオリンピックが旨くいくのか、日本の選手は世界のなかでどの程度に通用するのか、否応無しに結果は出る。負けても良いと思う。この年になると、勝敗より闘いの中での懸命の動作が、命の閃きが見れたら、それで充分。愛国心は捨てよう。そんな齢だ。涼しく過そう。

▽秋のスケジュールが上記の通り固まりました。ぜひどれかの行事には参加してください。勿論全部に出席も、大歓迎です。（田原）